

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈ーにいかに向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01]

JICA海外協力隊体育隊員の活動考察 (人)

オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02]

中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化 (教)

自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勸¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03]

野球未開の地における競技普及 (経,人,政)

MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04]

なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか？ (社)

日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01] JICA海外協力隊体育隊員の活動考察（人）
オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

近年、開発と平和のためのスポーツに関する取り組みが盛り上がりを見せている。日本の取り組みの中心となるのは、JICA海外協力隊の体育・スポーツ隊員であると考えられる。だが、体育・スポーツ隊員の考察は十分にされず、特に、当事者視点による考察が成されていない。当事者視点の考察は、オートエスノグラフィ研究に該当する。よって、隊員の活動をオートエスノグラフィ研究を用い、考察する。その結果、活動における隊員の感情から、文化的・社会的理解を深める。さらに、対象のヨルダンにあるパレスチナ難民キャンプを考察するにあたり、オートエスノグラフィ研究を用いることが、適切である。なぜなら、ヨルダン国民の9割以上がイスラームを信仰し、イスラーム法を守り、生活している。箕浦（1990）が述べるように、日本とは異なる子ども観を有している。加えて、ヨルダンは、パレスチナから難民を受け入れてきた。結果、国連パレスチナ難民救済事業機関が管轄するキャンプが存在し、小中学校もある。国連パレスチナ難民救済事業機関（2000年）によれば、学校では、国連の掲げる価値と原則を確実に準拠するように努めているとしている。そのため、人権などに価値を置く考えが入ってくる。さらに、JICA海外協力隊を中心とした日本人の価値観も流入する。つまり、難民キャンプの学校は「異種混淆」した場所である。その環境での活動は、独自の困難さが生じる。その困難さを考察するには、活動を行った隊員の当事者視点が必要であると考え、オートエスノグラフィ研究を用いる。以上を踏まえ、本発表では、ヨルダンにおけるJICA海外協力隊の活動をオートエスノグラフィ研究と関連づけ述べる。その中では、自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直しを行い、活動を行った当事者による視点を重視する。さらに、「体育」や「スポーツ」、「難民」といったものに揺さぶりをかけることを試みる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02] 中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化（教）
自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勸¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

現在、日本の柔道競技の人口減少は顕著であり、また、中学校・高等学校においても部活動の多様性が求められ、現状の環境では部活動での柔道に魅力を感じることができない生徒が増えている。

そこで本研究では中学・高校の柔道部に所属する柔道競技者が、多様な環境の中でもより楽しく柔道を続けられることを目的とし、また、先行研究で示されている柔道の本来の魅力の抽出に留まらず、現代社会における柔道競技の持つ必要性を構造化してみたいと考えた。本研究では、柔道の「基本属性」、「社会要因」、「競技特性」、「練習メニュー」、「柔道精神」の5つの領域に焦点を当て、主に4件法を用いた質問紙調査を東京都内及び栃木県内の中学校・高等学校柔道部に所属する生徒167名に実施し、統計学的分析(相関係数・クラスター分析・重回帰分析)を行った。有意水準は5%とした。重回帰分析の結果より、社会要因と練習メニューは全ての項目に対して有意差が見られ、社会要因と練習メニューが柔道の魅力を形成するうえで大きな要素であることが示された。特に、他者との広い柔道関係の構築、乱取り練習、ウォーミングアップでの充実感が柔道の魅力に繋がっていることが示唆された。

クラスター分析の結果より、中高の柔道部活動集団は属性項目や技術から判断すると4グループに大別され、その中でも柔道実績の高い人は、柔道の動機づけとして、試合に勝つことではなく、柔道精神を体得したいと考える傾向があることが示された。ここでの柔道精神とは「精力善用」と「自他共栄」の精神を指しており、柔道競技での技術的な上達が、これを助長させると予想される。つまり柔道競技においては、勝敗よりも柔道精神を獲得する行程において、現代の競争社会や格差社会の改善に繋がる、精神の充足を得られるのではないかと考察した。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03] 野球未開の地における競技普及 (経,人,政)
MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

他競技関係者（ファン？）から「マイナースポーツ」と揶揄（称賛？）されることの多い野球。確かに日本では絶大な人気を誇る野球(*1)だが国内競技人口は減少が止まらず、笹川スポーツ財団の調査では2016年にサッカーに抜かれて以来現在は2位(*2)の268万人になっている。少ない少ないと槍玉に挙げられる割には、100人いたら2、3人は野球をやっていることになる。

そこで今回取り上げるクリケット大国インドである。厳密な数字は難しいが一般的にクリケットの競技人口は約1億5千万人と言われる。マイナースポーツである野球ですら10万人ほどと言われている。まあまあに思えるが、それはインド国民の1万5千人に1人ということの意味している。10人に1人がやっているクリケットとは絶望的な差だ。よく言われる言語や宗教の違い以前に、数字の上でも極めて不利な環境にあるインドで、野球というマイナーな競技を普及させようとする時、どんな戦略が考えられ、どんな困難が体现されるのか。今回の報告ではMLBインドによる野球普及活動を切り口に競技未開の地における普及活動について考察を進める。

先行研究を探すものの「インド・野球」や「インド・MLB」といった基本的なタームですら芯をくったヒットはほとんどない。色々試した結果は「ワインドアップ」「マインドマップ」「ウインドサーフィン」。インドにおける野球普及に関する先行研究はほぼ皆無である。そこで今回はインドにおける野球競技の普及過程について、MLBインドの成立から発展を基軸にインドの野球競技の現状を描くことを目指す。その際、MLBの海外展開、インドにおけるMLBインドの展開、インドの野球普及と本場MLBとの関係の三点を通じて、インドの野球競技普及から競技の本場米国への国際的連関までを俯瞰する考察を進める。

*1：MUFGRC2024年

*2：笹川スポーツ財団2023年

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04] なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか？（社）
日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

グローバル化の進展に伴い、アスリートの国境を越えた移動はキャリア形成上、重要な要素となっている。特に、エリートアスリートの地理的流動性は、国際的スポーツ産業において価値ある資産と見なされ、競技キャリアの発展のみならず、異文化への適応力も求められる。異国でキャリアを構築するアスリートにとって、引退後にホスト国で新たな職業選択を行うことは重大な課題であり、制度的支援の不足や文化的障壁の存在が指摘されてきた。これまでの研究において、アスリートのキャリア発達や引退後の適応に関する知見は蓄積されているものの、ホスト国における移民アスリートのキャリア移行に関する研究は限定的である。本研究は、タイにおいてプロサッカー選手として活動し、引退後に現地で農業に従事している元アスリートを事例とし、移民アスリートにおけるキャリア移行およびその意味づけを明らかにすることを目的とする。質的ライフヒストリー研究のアプローチを採用し、ナラティブ・インタビューおよびリフレクティブ・ライフライン法を用いてデータ収集を行った。データ収集は2回の半構造化インタビューで構成され、1回目は幼少期から現在に至る人生経験、教育歴、スポーツキャリア、引退後の職業選択、文化的適応に関する自由叙述を促した。インタビュー中に語られた主要なライフイベントは研究者によって時系列で整理され、2回目のインタビューではそのライフラインを視覚資料として提示し、参加者とともに内容の検討・修正を行いながら、人生の転機に関する内省を促進した。参加者は各転機の意味づけおよび感情的影響（0～10段階）を示し、人生軌跡に対する認識を再構築した。本発表では、移民アスリートのキャリア移行およびその意味づけの分析を通じ、国際的競技経験が引退後のキャリア選択にいかなる影響を与えるのかを明らかにし、ホスト国におけるアスリートのキャリア形成に関する理解の深化を図る。